

釘がすべて、新しいものに變つてゐるのは、明治修理の際に、打ちかえたものであろう。これらは、解体後とり出され調査されたが、その結果については、福山、高田、山崎、秋山四氏の論文に詳述してある通りである。

また、本尊の向つて右側に箱がありその中に巻物この軸の部分はきわめてX線を透しにくい及びX線を透しにくい不定形のもの、またその上に折りかさなつた紙が見える。これ等からは取出されて後、巻物は水晶軸の阿彌陀經一卷であり、不定形のもの、ガラス破片や銅製鳳凰の残片等であることが分つた。これについても、福山氏の論文に詳しいので、その方にゆずることとする。

附載二 鳳凰堂本尊胎内納入物中のガラス破片について

山崎 一雄

表題のガラス破片は別項福山氏及び毛利氏論文中の記載及び挿圖第一・二の如きもので大小二個ある。小は不規則な形をなす破片で、色はやや黒味を帯びた黄綠色、細かい氣泡が存在し厚さ約二ミリ、重量一・一グラム、平面ではなく僅か彎曲している。曲つてゐる内面に截金が施されているが、残念ながらその文様の形は明かでなく、形をなさぬ線が認められるだけである。又この破片の原形も想像し難い。截金を施した古代のガラスは我國に於いて未だ報告された例を聞かず、極めて貴重な資料である。なおこのガラス片の體積を求め比重を計算すれば約二・四となり、アルカリ石灰ガラスであることが推定される。

大きい破片は挿圖で明かな如く、柿のヘタとでも形容すべき形をなし、直径二・九ミリ、厚さ四ミリのボタン状の型でおしてつくられたガラス塊に、厚さ二ミリの彎曲した破片が熔著して居り、その中心に厚さ三ミリ、直径十ミリの圓形のガラス塊が熔著している。重量一三・五グラム、色は淡青色でサイダー瓶の色に近く、多數の小さい氣泡が含まれている。比重は約四と測定され小さい方の破片より大きく、鉛ガラスと推定される。比重から計算すれば酸化鉛の含

挿圖 1. ガラス片(小)

有量五五%に相當する。形から見て天蓋にはめこまれた花形の裝飾の如きものの破片かとも想像されるが、未だ天蓋を詳しく調べる機会がなく確めていない。

我國古代のガラスとしては古墳から出土するガラス小玉の類は多數報告されているが、玉類以外のものとしては正倉院御物を除けば、舍利瓶(法隆寺、崇福寺塔等)、骨壺(文福麻呂)等二、三を數えるに過ぎない。特に平安時代のものとしては中尊寺の藤原三代の遺体調査の際朝比奈貞一氏等により報告されたガラス板の小破片があるのみである。ここに述べた大小二個の破片が鳳凰堂創建當時(天喜元年、一〇五三年ごろ)のものであるか否かについては確實性を缺くが、少くとも寛文十年、一六七〇年)の修理以前のものであることは認められるであらう。

これらの破片は我國ガラスの遺品の中では形においても、又截金を有する點においても他にその例を見ぬ珍しいものであるため、ここに京都國立博物館の毛利久氏の好意により實物を拜見して得た結果の概略を報告する次第である。

挿圖 2. ガラス片(大)